

全学共通教育の平成 29 年度実施に 向けた研修会（FD）報告

大学教育基盤センター調査研究部編

第 1 部「全般的課題」では、現在進行中の全学共通教育改革がテーマとなったが、特に平成 29 年度から導入されるクォーター制に焦点を絞った説明がなされた。続く第 2 部「分科会」では、授業担当者を中心に 5 つの分科会（別途実施は除く）に分かれて、より具体的な討論と情報交換を行った。

日時：平成 28 年 12 月 6 日（火）13:20 - 16:10

場所：教育学部 415 講義室ほか

対象：全教員（特に平成 29 年度全学共通教育担当予定の教員）

第 1 部 全般的課題

1. 全学共通教育の改革について
2. クォーター制の実施について
3. 受講登録方法の変更と全学共通教育事務手続きについて

第 2 部 分科会

1. 主題科目「主題 B」分科会
2. 主題科目「主題 C」分科会
3. 学問基礎科目分科会
4. コミュニケーション科目「大学入門ゼミ」分科会
5. コミュニケーション科目「情報リテラシー」分科会

※主題科目「主題 A」、既修外国語（英語）は別途実施

以下、当日の提題者と記録者が中心となって報告原稿を作成し、研修会の企画・実施にもあたった大学教育基盤センター調査研究部が編集をおこなった。

【大学教育基盤センター調査研究部】石井知彦（調査研究部長／工学部）、葛城浩一（共通教育コーディネーター／大学教育基盤センター）、佐藤慶太（同）、西本佳代（同）

【その他の執筆者】高橋尚志（大学教育基盤センター副センター長／共通教育部長／教育学部）、清國祐二（地域教育部長／生涯学習教育研究センター）、林敏浩（ICT 教育部長／総合情報センター）、横平政直（共通教育コーディネーター／医学部）、山田佳裕（共通教育コーディネーター／農学部）

第1部 全般的課題

司会：葛城浩一（共通教育コーディネーター／大学教育基盤センター）

記録：佐藤慶太（共通教育コーディネーター／大学教育基盤センター）

1. 全学共通教育の改革について

高橋尚志（大学教育基盤センター副センター長／共通教育部長／教育学部）

現在進行中の全学共通教育カリキュラム改革について、改革の背景、平成29年度における主な変更点について説明を行う。まず改革が進められる背景として、本学の教育目標の実質化、現行カリキュラムの検証を通じて現れてきた問題点の解消、全国的な動向への対応、補助金事業とも関係する本学の特色を先鋭化する必要性、といった事柄が挙げられる。しかし改革の目的の基本は、本学の教育目標を実質化すること、具体的にいうと「共通教育スタンダードの実質化」である。このために、クォーター制の導入、文系科目と理系科目の履修単位指定、主題C－基礎科目の必修化という改革が行われる。これらはそれぞれ、多様な学びの可能性を確保するため、専門に偏った履修の在り方を是正するため、大学の特色、地域志向の方向性を確立するため、という目的を持っており、共通教育スタンダードに関して、現在の体制では手薄な部分を補うための具体的な方策である。（この後、クォーター制の適用に関する細かい点についての説明がなされた。この点については、特集の報告でも扱われているので、省略する（本誌7－15頁を参照）。）

2. クォーター制の実施について

石井知彦（調査研究部長／工学部）

高橋共通教育部長の話が中身だとすれば、これからお話しするのはいわば「器」についてである。来年度から導入されるクォーター制は、平成28年度4月15日の教育研究評議会において決定された。その狙いは、ギャップタームを作り出すことで留学生を増やすことではなく、あくまでも教育効果の向上にある。順序としては、まず全学共通教育において適用し、その後各学部における適用を検討する。全学共通教育でもすべての科目で適用するのではなく、主題科目でまず適用する。学問基礎科目は29、30年度を疑似クォーター型科目とし、検証の結果、適用が可能ということであれば、適用する。クォーター型科目の導入に伴い、授業の登録方法が変更される点には、注意が必要である。特に4月3日～6日の間に授業の登録を済ませなければならないこと、履修登録取消期間が、おおよそ授業第一回終了後の1週間となることは、大きな変更点であり、今後、学生向けの周知会等を通じて、情報がすべての学生にいきわたるよう気を配っていく。

* 「3. 受講登録方法の変更と全学共通教育事務手続きについて」の内容は省略する。

第2部 分科会

1. 主題科目「主題B」分科会

司会・記録：佐藤慶太（共通教育コーディネーター／大学教育基盤センター）

今年度は 11 名の参加があった。まず司会（佐藤慶太）が、来年度から実施されるクォーター型科目についての説明を行い、その後学生の履修登録やシラバスの書き方などについて、参加者からの質疑を受け、これに返答しつつ、細かい点の確認を行った。

その後、来年度の担当者に向けて提示される「主題 B 授業デザインガイドライン」の内容紹介が行われた。これは、今年度調査研究部の勉強会で練り上げたもので、主題 B の理想的な在り方を文章でしめすものである。ここでは、「主題 B は学部開設科目における課題探究の準備の場であるとともに、何が現代のわれわれにとっての課題であるのかを知る場、特定の専門分野からのアプローチを相対化できる視点を獲得する場であることが理想」として、主題 B の理念が明確化されている。この理念を軸にして、どのような授業のタイプがありうるか、モデルとしてどのような授業が考えられるかを示すために、「授業デザインフローチャート」、「モデルシラバス」も作成されている。これらの内容紹介は、司会と、モデルシラバスの作成を担当した三宅岳史教員（共通教育コーディネーター／教育学部）が担当した。

その後、参加者全員で、主題 B の授業の在り方について活発なディスカッションが行われた。紙幅の都合上、二つだけ重要な議論を紹介したい。まず「主題 B の授業で課題解決までいってよいのか？そもそも現代社会の問題が、授業内で解決されるのか？」という疑問が参加者から出された。これに対しては、授業内で学生が提示する課題解決策は、あくまでも暫定的な解決であることを知らせること、さらにその課題解決策を批判的に吟味するような視点を持たせることが必要ではないか、という意見が別の参加者から出された。この議論から、主題 B の役割は、最終的な解決策への到達ではなく、継続的に問題について考えていく動機づけを与えることだ、という点が明確になったように思われる。次に「課題発見、課題解決を学生にさせるとなると、きめ細やかな指導が必要になる。一方で、なるべく多くの学生を受け入れるように、という要求をするのは矛盾しているのではないか？」という問題提起があった。これについては、今後主題 B で、課題発見、課題解決について大人数講義型で教える授業と、少人数グループワーク中心型で、きめ細やかな指導を行うものという二つの層を分けていく必要があるのではないか、という意見も出された。今後の主題 B の在り方について具体的なイメージを形成する手掛かりとなる議論であった。そのほかにも、今後の主題 B をめぐって議論がなされたが、生産的な提案につながるものが多く、得るものが大きい分科会であったといえる。

2. 主題科目「主題C」分科会

司会：清國祐二（地域教育部長／生涯学習教育研究センター）

記録：葛城浩一（共通教育コーディネーター／大学教育基盤センター）

本分科会では、参加者がいずれも地域教育部のメンバーであったことから、まず、現在進められている主題C－基礎科目のe-ラーニングコンテンツ作成の進捗状況について、参加者から報告がなされた。スケジュール的には少し遅れているものの、来年度の授業実施にあたって問題なく進められていることが確認された。その後、地域連携戦略室の鈴木教員から、主題C－実践型科目の履修状況についての報告がなされた。この報告では、履修者数をいかに増やすか、担当教員をいかに確保するか、等の課題が指摘され、こうした課題に対する対応策として、参加者からは様々な意見が出された。例えば、履修者数をいかに増やすか、という点については、「実践型科目はコスパが悪い」（エフォートが単位数に見合わない）と考える学生が少なくないことから、「単位数を4単位にしてはどうか」という意見が出された。また、主題Cが地域に対して関心を持つ学生の裾野を広げるという趣旨で新設されたことから、「地域に「深く」コミットさせている現状の実践型科目だけでなく、「浅く」コミットさせるような実践型科目も考えてよいのではないか」という意見が出された。地域教育部のメンバー以外の参加者がいないことは大変残念ではあったが、今後の主題Cの在り方について考える上で濃密な意見交換ができた有意義な分科会であった。

3. 学問基礎科目分科会

司会：山田佳裕（共通教育コーディネーター／農学部）

記録：横平政直（共通教育コーディネーター／医学部）

学問基礎科目分科会では、司会進行（山田佳裕）のもと、共通教育部長（高橋尚志）により、学問基礎科目を来年度から擬似クォーター型科目とすることについての説明があった。以下のような質問や指摘を受けた。クォーター型科目の中間試験後の2週間以内の成績入力は学問基礎科目も対象なのか。オムニバス形式でやっていて、前半後半に分け難い。厳密な試験を目指さないのであれば、隣同士に座って行う試験も可能か。将来的には学問基礎科目も1単位になるのか。試験について今まで90分だったのを45分にして大丈夫なのか。

次に高橋共通教育部長より学問基礎科目についてのシラバス作成方法についての説明があった。擬似クォーター型科目ということで、前半後半のまとまりが見えるようお願いした。これに対し、8週目の試験を原則45分にしなければならない理由は何か、シラバス内の「授業90分×15回」という記載は紛らわしいのではないか、などの質疑があった。

さらに引き続いて総合討論が行われた。積み上げ型の複数の講義の配置の方法について

どのようにしたらよいか。履修に関する周知は担当教員が行うようにという事務連絡があったが、特に学部外の学生への周知は難しい。抽選について、募集人数枠の決まり方、教室のサイズの調整について。事務職員だけでなく、教員への履修システムの周知を望む声があった。

以上、活発な質疑が行われたが、担当教員にとって来年度からの試行に大きな支障となり得る問題点は少ない印象であった（細かい問題点については今後の検証作業により修正する）。一方で、抽選システムの開発に時間を要しているため詳細が見えてこないというソフトウェア開発会社に関する問題点は大きいと感じられた。

4. コミュニケーション科目「大学入門ゼミ」分科会

司会・記録：西本佳代（共通教育コーディネーター／大学教育基盤センター）

本分科会では、三つの報告が行われた。第一報告は、教育学部の松下幸司先生による「教育学部学校教育教員養成課程の大学入門ゼミについて」、第二報告は、医学部の西屋克己先生による「大学入門ゼミにおける反転授業の活用」、第三報告は地域連携戦略室の石原秀則先生による「能動学修について」である。例年、本分科会では、授業公開をお引き受けいただいた先生に、報告をお願いしている。第一報告の松下先生には、7月に実施された授業公開の内容を踏まえ、教育学部学校教育教員養成課程の大学入門ゼミについてご報告いただいた。教育学部学校教育教員養成課程の大学入門ゼミは、教師を目指す学生の育成を主目的に掲げ、学校参観や小豆島研修といったフィールドワークと共通コンテンツの部分をバランスよく配置した構成になっている。その概要及び、受講生や担当教員の感想等を松下先生がこれまでに撮影された写真と共にご紹介いただいた。第二報告の西屋先生には、5月に授業公開をお願いした。西屋先生の大学入門ゼミでは、反転授業形式が採用されている。つまり、授業内容に関する基礎知識を動画で予習し、その内容を前提として、対面講義ではグループディスカッションを行っているのだが、通常の授業形式を採用した時よりも、学生を深い学びに導くことができるという。また、eポートフォリオも並行して導入し、学生の振り返りの機会を担保しているという。受講生を対象とした質問紙調査の結果も踏まえつつ、反転授業形式による大学入門ゼミの実践をご紹介いただいた。第三報告の石原先生は、授業公開の担当者ではないが、地域連携戦略室からの説明とお願いの機会として、ご登壇いただいた。地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）の採択により、大学入門ゼミで能動学修を導入することが求められている。

上述のとおり、非常に充実した内容をお三方にご報告いただき、参加者（13名）からも数多くの質問が寄せられた。その盛り上がりはすさまじく、当初第三報告の後に予定していた総括ディスカッション（20分）の時間を確保できなかったほどである。次年度大学入門ゼミを担当する参加者が大いに刺激を受けたのは間違いないだろう。

5. 情報リテラシー分科会

司会・記録：林敏浩（ICT 教育部長／総合情報センター）

今回も昨年度同様、情報リテラシー分科会と情報リテラシー実施部会の併催で実施した。例年、情報リテラシー分科会は参加者数が少なく、情報リテラシー科目担当者からの参加が続いていたので、分科会の実質化の観点からこのような併催実施となった。なお、昨年同様、参加者は情報リテラシー実施部会委員および担当教員であったので、それ以外の方々も参加しやすい形を検討しないといけないと感じている。一昨年度より、情報リテラシー科目の TA の適正人数について検討を行っており、原則 50 名に 1 名の TA（2 時間×15 回）を雇用原則とすることの確認を行った。次に、平成 29 年度情報リテラシー共通項目について議論した。平成 29 年度より e ラーニング科目である主題 C－基礎科目が必修科目になることに伴い、情報リテラシー共通項目に「LMS を使えること」を追加するかどうか検討した。検討の結果、共通項目の中の「香川大学が提供する主なウェブサービス」で包括できるため、暫定的に従来どおりとすることになった。また、主題 C－基礎科目は第 2 クォーター開講であるため、それまでに情報リテラシーで LMS の使い方を可能な範囲で教えることが可能かどうか検討した。特に各教員が LMS の使い方を教えることができるようにするための FD を 2 月下旬に行うことが確認された。なお、情報リテラシーが後期に開講される学部があることから、その学部の対応が今後に残された課題となった。その他として種々の意見交換が行われた。情報リテラシー科目を適正に実施するという観点からは実りある分科会となった。なお、本報告は本分科会司会者の観点で分科会の様子を取りまとめたものであり、情報リテラシー実施部会議事録とは厳密な整合性をとっていないことを念のため付記する。

[主な参加者のアンケートの回答]

本研修会を受けた参考となったところ、お感じになったところなどをお書きください。

- ・登録期間等の履修システムの変更、特に学生にとって時間的余裕がなくなっている。このことに起因する不本意な科目の選択を引きおこさないよう、配慮するよう（web での自動的な却下がないように）お願いしたい。
- ・事務手続き等の説明が丁寧になされてありがたかった。
- ・具体的説明が後手になっていたので、中途半端になった感じがする。
- ・前回説明からの変更点を確認した。
- ・具体的な時期や仕組みについて分かったので良かったです。
- ・1年生と2年生以上の成績付けのタイミングは？方法は？
1年生は2回（成績はそれぞれ（クォーター制））
2年生も2回（成績はその総合（セメスター制））
- ・来年度の主題科目「主題 B」の変更点が分かりました。慌ただしいなという印象です。
2年生以上は8回終了後の評価は必要ないのか？

その他、本研修会や教育 FD 活動、全学共通教育のあり方、あるいは広く本学の教育に関して望むことなどがございましたら、ご自由にお書きください。

- ・文系と理系の履修の偏りが心配されるのはその通りであるが、現在の教育は各々の専門での授業でも「人間との関わり」、「社会との関わり」を充分教えているのではないか。最近の教科書もそのようになっているので、充分ではないかと思う。学生の興味とは別に理系に文系の授業を受講させるよりもその講義内で人文・社会的な関わり、応用を取り込む方が学生への実際の効果が高いと思う。つまり文系の教養も充分得られると思います。
- ・なるべく参加できる機会を設けてほしい。
- ・他大学がどうしているのか知る必要がある。特に大学での教育経験のない教員は他大学研修でも行うのがよいと思う。本当に改革を理解できないと思います。
- ・第3クォーターの履修登録期間が夏休み中なので、学生が忘れないように周知方法を検討していただければと思います。